

"もうひとつの"舞姫

1.はじめに

テーマ設定の理由

『舞姫』は豊太郎にとって悲劇とも言える結末を迎えてしまう。しかし、それはエリスにとっても悲劇。むしろエリスの方が残酷な結末を迎えていると思う。そこで、エリス目線(エリスの日記)からも『舞姫』を描くことによって二つの舞姫を比べることが出来る。そうすることで二人の共通点、違い、同じことがらについて抱いている思いを比較して『舞姫』という作品をもっと深く読めるようになると思い、このテーマにした。

テーマの結論

エリスの心に残った傷痕は大きく、数年後、病院から家に戻ったエリスはすでに生きる希望を失っていて、ついに自殺してしまう。

2. 本論

七月十日…時刻は朝の四時頃でしょうか。もうすぐ夜が明けるでしょう。なぜか早く目覚めてしまいました。前々から始めようと思っていた日記を…今時間に余裕があるので初めて書きます。

こうしてペンを執って、人並みに字が書けるようになったのもすべて太田様のおかげです。私がこうしてここに充実した気持ちで机に向かっていれるのも太田様のおかげなのです。太田様と出会い、早三ヶ月が経とうとしています。あの時、私と太田様を出会わせてくれたのは亡き父ではないでしょうか。私と母を残し先に逝かれた父が、私達のことを不憫に思い、私達のところへ導いてくれたのではないかと本気で思う時もあります。(そして何故か、太田様と、父の姿を、重ね合わせずにいられないのです)

ですから…きっとあの出会いは偶然ではなく、私と太田様はきっと結ばれる運命にあるのでしょう。そうとしか考えられません。

私は一生太田様を愛し続け、ついて行きます。と言うより…太田様は私の暗い未来に差し込んだ一筋の光のようなもので、私はその光を頼りに歩いていくしかないのです。

…<中略>…

十月二九日…今日は夕方から空に暗雲が立ち込めて街に雪を降らせました。

…私はおそらく太田様の子を身籠ったようです。数日前に舞台上で倒れた時はそんなこと疑いもしなかったのですが…母に"妊娠しているのではないか"と言われた時から疑い始め、次第にその疑いの色は濃くなっていき……私は怖かったのこでしょう。太田様がどんなお顔をされるか、私を見放すのではないかと。ですから、心のどこかで妊娠を認めたくなく、今日まで疑ってやめなかったのこでしょう。ですが…今日の太田様の言葉があまりに嬉しく、そのような不安はもう心のどこにもありません、消えてしまったのこです。

…<中略>…

十二月十三日…会いたい。太田様がここを発たれてから一週間。毎日手紙を送るも、一通一通、一文字一文字を綴る度にこの気持ちは積もって、私を苦しめるのこです。ちょうどこの窓の外で雪が降り積もっていくように…。

厳しい寒さがこのような気持ちにさせているのこでしょうか。

…<中略>…

十二月二六日…今日はとくに寂しさが込み上げてきた日で、毎日寂しさを書いてきた手紙でも、今日ばかりは私の寂しい思いをすべて綴ったつもりです。

なぜでしょう…私はこんなにも独占欲の強い人間だったのこでしょうか。太田様には出世して欲しいという気持ちがある一方で、仕事を疎かにしてでも私に費やす時間を増やして欲しいという気持ちが、ここ二十日ほど会うことが出来ない間に、前者にも勝るほど大きくなり、私の奥深くに眠っていた独占欲を起こしているようです。 ですが、私は信じています。太田様がベルリンに戻られることを…。

…<中略>…

一月一日…新年初めの年だというのに、雪は降らず、一日中、陽の光が街に差し込んでいました。

…何と素晴らしい一日であったでしょう。やっとお戻りになられたのこです。こんなに幸せなことがありましょか。

今日は一日中太田様についてまわり、お腹のこどもの話をしたり、ロシア出張中の寂しさの愚痴をこぼしたりもしました。ですが、どんな話をしても太田様は嫌なお顔見せず、私の話を聞き入って下さいました。

嗚呼、なんと幸せな一日だったのこでしょうか。夢のようでした。

…＜中略＞…

一月七日…どうしたのでしょうか。なかなかお戻りになれません。どうしたのでしょうか。なぜかとても不安です。ただ太田様が帰ってこないといつ不安ではなく、何か別の…。何もないと良いのですが。

パラノイアなどと言う病気は少し回復したみたいで…家に帰って来ました。何年ぶりでしょうか。

このノートを開くのも久しぶりです。不思議なことに、何も思わないのです。過去の日記を見ても。私の人生とは何だったのでしょうか。あの男は何故私の目の前に現れたのでしょうか。父も母も、そしてお腹の赤ちゃんも失って…私はどう生きていけましょうか。これが私の遺書となるのでしょうか…。

人間は変わることはないでしょう。普段奥深くにある人格が時として表に出るだけで。だから…あの男…あの男も…。私と出会った時から何度も嘘をついてきたのでしょうか。立身出世を捨て切れないという思いがまだあの男の中にはあって…それで私を…。

あの男が憎い。殺したい、殺してしまいたい…

3.まとめ

太田が抱えていた不安を、エリスは最期の最期まで微塵も感じていない。ただ敬愛し切って愛していたのだ。

この日記(パラノイア発症より数年後)を最後にエリスは命を絶つ。エリスが最後に得たものは幸せでも愛でもなく、人間の本当の姿—人間は変わることはなく、ただ元から内面にあるものが時として浮き出て、別人のようになる—だったのだ。